

アブストラクト

山田真美

本論文は、第二次世界大戦中の 1944 年（昭和 19 年）8 月 5 日にオーストラリアのカウラ第 12 戦争捕虜収容所 B キャンプで勃発した（最大で）1,104 人の日本兵捕虜による集団自決的暴動（通称「カウラ事件」）を、事件に参加した日本兵たちの「日常」という視点から再考察した研究である。

捕虜になることは「恥」であり、むしろ死を選ぶべきであった当時の日本軍の教えも手伝って、カウラ事件の存在や体験が語られることは極端に少なく、日本の戦史・近代史の中でもほとんど注目されてこなかった。筆者の関心は、この事件がなぜ生じたのかを探るとともに、事件を起こした捕虜たちの日常を彼らの身体・場所・物質性から具体的に検討することによって、カウラ事件の意味を考察することにある。

研究の方法は、文献資料として第二次世界大戦期に記録されたオーストラリアの公式文書、新聞記事、日本の戦記などに依拠しつつ、主要部分は筆者が長年にわたって実施した元日本兵へのインタビュー（1993 年 [平成 5 年]～2014 年 [平成 26 年]）を用いている。

論文の構成は以下のとおりである。

序章では、筆者とカウラ事件との 21 年間にわたる関わりが紹介され、研究目的とライフヒストリーを含む研究方法が示される。

第 1 章では、第二次世界大戦期の日本兵の身体が私的制裁という日常的な激しい暴力を通じて軍隊化されてゆく様子に加え、日本の捕虜政策の変遷が論じられる。

第 2 章では、国際法を遵守したオーストラリアの捕虜政策が語られる。

第 3 章では、カウラ事件で死亡した 231 人の日本兵捕虜たちのリストが複数のソースを通じて構築され、彼らの身体をめぐる実像が明らかにされる。今回作成されたリストには、捕虜の生年月日、出身地、所属階級、職業、婚姻の有無、捕虜になった日（年齢）、捕虜になった場所、捕虜になった前後の身体状況、捕虜になった後で測定した身長体重とそこから導き出した BMI、カウラ到着年月日（年齢）、死亡原因（年齢）が含まれる。このリストから、カウラ事件で死亡した日本兵の大多数がニューギニアとその周辺で捕えられた陸軍出身者（下士官・兵）であったことが明らかにされる。

第 4 章では、B キャンプの日常が元捕虜たちの語りによって具体的に示される。それは西洋式の衣類に身を包み、豊富な食事が与えられ、労働は強制されず、暇な時間は賭け事に興じるという、地獄のニューギニア戦線とは対照的な「天国」の生活だった。ニューギニアで一旦は死に直面した彼らの身体が、やがて過剰なエネルギーを持って余すまでになっていった。また女形を演じること／観ることへの熱中など、ジェンダーに関連した身体をめぐる彼らのまなざしに変化が生じていた。

第 5 章では、カウラ事件の状況が生存者らの回想を通じて再現される。従来カウラ事件

の目的は「自決すること」にあったとされてきたが、日本兵のなかには本気で「脱走」を図ろうとした者がおり、従来の画一的な「捕虜」とは異なる個性を持った日本兵がいたことがインタビューから明らかにされた。

第6章では、カウラ事件直後の様子が士官の事件関与の可能性も含めて語られる。「事件の根本的な原因は虜囚の恥、直接的な原因は下士官と捕虜の分離命令」にあるとの公式見解がBキャンプ団長から発せられた。しかし実のところ団長のもとには隣接するDキャンプの日本人士官捕虜らから密書が届いており、団長が発した公式見解の裏には士官の大きな影響力が在った可能性がある。

第7章では、カウラ事件後の新しい環境が語られる。Bキャンプの日本兵捕虜のうち下士官はマーチソン収容所へ、兵はヘイ収容所へと移送された。新しい収容所で演劇班に入り「女形」を演じ始めた下士官と、ハンセン病のためカウラに留め置きとなり工芸品を手作りし始めた兵隊の姿が紹介される。両者はそれまでとは正反対の新しい日常に没頭し、短時間でそれを深く受容してゆく。

第8章では、復員した元捕虜たちの戦後が、豪州カウラ会、マーチソン会の活動を通じて語られる。このうちの豪州カウラ会は、戦後はカウラ事件のスポークスマンの的に活動した。しかし同会の歴代会長8人はカウラ事件を無傷で生き残り、また一般会員の約3分の1はカウラ事件を全く体験していない。士官捕虜たちの集まりであるマーチソン会も、カウラ事件を体験した者とそうでない者との間に認識の差があったことが示唆される。

終章では、カウラ事件が日本兵たちの極限の戦争体験という「非日常」の日常化から、捕虜という「非日常」の日常化への転換という、極度の落差による葛藤の中で生じたこと、また戦後も彼らは「元捕虜」という体験をそれぞれの中に抱えて生き続けたこと、元捕虜たちの男同士のホモソーシャルな絆が戦後も長く維持されたことが結論として語られる。

カウラ事件は従来『戦陣訓』に代表される精神論によって一定方向から語られる傾向が強かったが、今回、これまでとは逆の物質性という方向から考察を試みたことによって、事件のリアリティに新たな一面を見出すことができた。カウラ事件とは、きわめて特殊な事件でありながら、その実、戦争と兵士・男性性、日本社会の普遍をめぐるさまざまな示唆をも与える出来事であった。